

回想のドルジェラクパ峰(ジ ユガールヒマール)1985

ランシサ氷河 4800m から見た ドルジェラクパ峰



登山期間：1985 年 8 月 27 日～10 月 17 日

目標山名：ドルジェラクパ (6966m)

山 域：ジ ユガールヒマール山群(中部ネパール)

登山隊名：日本ネパール合同登山隊

隊 員：10 名 (日 7 名)(ネ 3 名)

要 員：リエゾンオフィサー、メールランナー、コック、キッチンボーイ等 5 名

ポーター：40 名強

費 用：約 600 万円 国内合計 363 万円

隊荷重量：約 1,000 kg

計画概要

ランシサ氷河の中部地帯 4,600m にベースキャンプを設営し登頂をめざす。

ベースキャンプから頂上までの高度差は約 2300m、ルートはランシサ氷河をつめ、カンシユルムのコルからドルジェラクパに取り付き主に雪稜をつめて頂上をきわめる。

移動

トラック移動 カトマンズ⇒ドゥンチェ 2 日間

徒歩移動 ドゥンチェ⇒ゴラタベラ⇒ランタン⇒キヤンジン⇒ランシサ氷河 BC 6 日間

思い起こせば、山岳会結成 10 周年を記念して海外遠征をと企画始めたのが 1982 年、実行に移すまで 3 年の準備期間を費やした。

当時エベレストに登った日本人は 10 名にも満たない程の人数、まだまだ海外遠征など選ばれた一部人々の世界のようなだった。

ドルジェラクパ峰 (6966m) の 1985 年登山活動概要

1985 年 (昭和 60 年) 8 月 27 日、N 隊長はじめ先発隊の 4 名がカトマンズに向けて大阪空港を出発、翌日から約 1 週間かけカトマンズ市内にてパーミッション取得はじめ、隊荷の現地調達品等を整えた。

9 月 4 日、いよいよ登山活動に向けて、カトマンズ出発、チャータートラックにて 2 日間、その後キャラバン 6 日間を費やし、9 月 11 日、登山基地となるランシサ氷河上 (4700m) にベースキャンプ(以下 BC)を建設した。

14 日から、BC から上布への登山活動が始まったものの、思わぬ大雪に見舞われ、やっと設営した第一キャンプ 5100m (以下 C1) も積雪に押しつぶされ、隊員も帰還途中ビバークを強いられやっとの思いで BC まで撤退、後日 C1 再建等、大変な登山活動の立ち上がりであった。

9 月 19 日、後発隊 3 名+トレッキング 2 名がベースキャンプ入り、ようやく全メンバーが揃ったことになる。

21 日、トレッキングメンバー 2 名は、カトマンズ向け下山 BC を後にする。

26 日、5700m 地に第二キャンプ(以下 C2)を建設

29 日、6,000m 地に仮第三キャンプ (以下 C3) 建設も Nepal メンバー疾病に、N 隊長が付き添いキャンジン(最後の村)へ降ろす

10 月 2 日、6300m に正式第三キャンプ(以下 C3)を建設

10 月 3 日、第一次アタック隊 4 名登頂 (N 隊長 C3 へ戦線復帰も高度障害発症)

10 月 4 日、N 隊長 C2 向け下山、残りメンバー 3 名第二次アタック隊登頂

10 月 5 日、最終 5 名 BC 帰還 (全隊員集結)

10 月 8 日、BC 解体撤収 下山開始

10 月 11 日、ドゥンチェ キャラバン終了

10 月 12 日、ドゥンチェ (トラック) ⇒カトマンズ

10 月 16 日、日本に向けてカトマンズ出発

10 月 17 日、帰国

トラック移動風景



トラック移動中に立寄った学校



道路に集まった人々



キャラバン風景

ドゥンチェ→ゴラタベラ→ランタン→キヤンジン→ランシサ氷河 BC 徒歩移動 6 日間



世界で最も美しい谷 ランタン谷



ベースキャンプ:ランシサ氷河 4600m 地点 1985 年 9 月 21 日



ドルジェラクパ峰
ランシサ氷河から



ドルジェラクパ西稜
C2 上部 C2～C3 間



西稜のナイフリッジ 6,000m 付近から写す



C3 建設予定地



C3 上部の雪壁 6,600m 付近 10 月 3 日第一次アタック隊員



ドルジェラク(Dorje Lhakpa)パピーク 10 月 4 日 第二次アタック隊



BC 撤収

下山初日、同山域に遠征していた長崎の山岳会ベースキャンプから暖かい祝福を頂いた



キャラバン最終日の夜、ネパール隊員、ポーターも混ざり打ち上げパーティーでシェルパダンスでお祝いパーティーに盛り上がった ネパール人、日本人見分けが難しい



トラック移動が終わりカトマンズには12日暗くなってから到着
翌日のカトマンズでもお祝いが



当時、私達のような弱小山岳会が単一会としてあのような経験ができたのは、登山界はじめ様々な方々によるアドバイス、ご支援を頂いたこと、そして全隊員が社会人であったにも拘らず、各職場より長期休暇にご理解を頂いたこと、所属会会員、それぞれ家族の理解と応援の賜物と今もなお感謝の気持ちを忘れることは出来ない。

多くの人々に支えられて、私達の初めてのヒマラヤ登山は終わった、疾病により戦線離脱した Nepal メンバーの活躍と、同じく麓の村まで付き添って降りた N 隊長のリーダーシップなくして、この登山活動は成功しなかったであろうし、更には、参加の E 隊員（当時大学院生）、それまで積雪期の登山経験が殆ど無く、遠征隊の BC、C1 要員として参加したにも関わらず、ヒマラヤの高地で殺伐としがちな男たちの空気を和ませるムードメーカーとして、時には C2 まで荷揚げの上、ユマールで約 6000m 近くまで登攀と大活躍した彼の行動がこの遠征の成功の大きな要因となったのは言うまでもない、又、あの遠征に直接参加できなかった人々に支えられていることのありがたさは今も忘れない。

あの頃幼かった子や生まれていなかった子供達が親世代となった月日の速さに驚くばかりだが、変わらないよき仲間達と、今でも迎え入れてくれる優しい山々に感謝の日々を送っている。